

景観フォーラム

巻頭言

現代を人類が経験した大革命的な事件としての第二のルネサンスとして捉えたならば、私たちは日々起こり得る様々な事件をどのように受け入れなくてはならないだろうか。今、原稿を書いているこの手は書いているということよりもパソコンのキーを叩いているに過ぎない。ペンを持って書くというほんの20年ばかり前の人類の単純な行為は殆どなくなりつつある。紙を代表する筆記用具に力を込めて文字という印を入れ込んでゆくという行為はこれから人類の手を益々離れてゆくのであろうか。

人間関係が時代とともに希薄化していくというのは、景観を代表として色々な社会の在り方に表現されていることであろう。ヨハネス・グーテンベルクが15世紀半ばに印刷術を発明してからほぼ500年が過ぎようとしている現在は、紙から電子媒体に大きく羽ばたこうとしている。この印刷技術がなかった時代の人類活動を想像してみると、人間活動がもたらす人と人との関係は、その発明以降よりもずっと濃密なものがあったのではないだろうか。そして現代はその印刷技術が物としては残らない電子という媒体が主体となる。そこに生まれる人間関係はより無機質にならざるを得ないというのが様々な事件から想像できる。

さて、現代を第二のルネサンスの時代として考えると、景観を人類のコミュニケーションの表れとして捉える場合、これからのまちづくりはどうあるべきであろうか。第一のルネサンスでは効率面からして職と住が分離されてきた。その結果、効率化は人類を無機質な関係へと追いやり、人と人との関係よりも、人と物との関係を優先させてきた。第一のルネサンスがキリスト教という大きな観念のしがらみにがんじがらめになった人間を解放しようとした運動であったが、第二のルネサンスである現代において、地球の裏側での事件が瞬時に知らしめ得る媒体の中に生きようとしている我々は、その解放された自由な人間がその本来の自由をどのように獲得するかを試されているとも言えるのではないだろうか。

人類は日々新たなコミュニケーション技術の創造と共に、新たな景観とコミュニティを創造してゆくというのが人類という種の性かも知れない。

NP0法人日本景観フォーラム理事長 齊藤全彦

<日本景観フォーラム2018年度（平成30年度）年間スケジュール>

*2018年度とは2018年4月1日⇒2019年3月31日のことです。

2018年

- 4月24日（火）第1回理事会・総会 於JICA研究所
- 5月23日（水）**第1回景観研究会（香取市佐原の景観）** 於JICA研究所
- 6月16日（土）**第1回景観まちあるき（香取市佐原）**
- 7月24日（火）**第2回景観研究会（歴史的文化的景観まちづくり）** 於JICA研究所
- 8月 夏休み（景観研究自由参加）or 一泊二日で遠方の町並み見学会など？
- 9月25日（火）**第3回景観研究会：桐生市の景観** 於JICA研究所
- 10月27日（土）**第2回景観まちあるき（桐生市）**
- 11月21日（水）第2回理事会 於JICA研究所
- 12月13日（木）忘年会（場所未定）

2019年

- 1月26日（金）**第4回景観研究会：都市美と景観** JICA研究所
- 2月14日（水）**第5回景観研究会：未定** JICA研究所
- 3月24日（土）**第3回景観まちあるき（未定）**

ジャズと屋台が生み出す万華景観

毎年、8月、お盆の次の週末、私は決って北信州の斑尾高原に行く。毎年この時期に行う斑尾ジャズというイベントにボランティアで参加するためだ。斑尾高原は、長野県飯山市と新潟県妙高市にまたがる標高約1000メートルに位置するリゾート地で、冬はスキーだが、夏はアマチュアミュージシャンによる野外コンサートが催され、そこへジャズ好きの若者、高齢者、家族連れがどっと集まるのだ。もともと斑尾高原はスキーリゾートのメッカなのだが、このコンサートのおかげで夏の避暑地としてもけっこう賑わっている。

私は斑尾ジャズの実行委員会の一人でもあり、この15年間、斑尾を毎年訪れ、現地の人とも交流しながら、第2の故郷にしてもいいくらい、なじんできたので、この地域にはことさら愛着をもっている。と同時にこの地域で開催される斑尾ジャズが大好きで、毎年参加して、最初から最後まで参加バンドの演奏を視聴せずにはいられない。

斑尾ジャズは12回開催したが、毎年、演奏メンバーの半分以上入れ替わるので、毎年来る常連客にとっても楽しみであろう。しかし、同時にお客さんに喜んでもらっているのが客席スペースを取り囲んでいるテント屋台である。私も日本人だからであろうか、そういう景観にウキウキわくわくしてしまうのである。お店も食の種類も豊富で焼きそばなどのビヤガーデンメニューからピザ、カレー、焼きとり、タイ料理などバラエティに富んでいる。飲み物もビールや焼酎だけでなく、高級なワインまで飲める。

おっと、今軽率にも「景観」などと言ってしまったが、これって景観と言えるの？というご意見もあると思うが、毎年この情景は継続していることでもあるので、景観としておきましょう。屋台の連なる景観というのは、神社のお祭りのときに見られる。普段はまことに殺風景な境内もお祭りのときには一変する。それが屋台の力というものだが、まさに屋台群は斑尾ジャズにとっても欠かせないものになっている。おそらくお客さんはお祭気分とジャズが頭の中で混然一体となり、さらに食べ物を食べることにより、味覚、視覚、聴覚による圧力によって頭の中は万華鏡になっているのだと想像する。

そこにまた今年は、さらに会場のすぐ外側にキャンピングテント群まで出現した。アウトドアスポーツメーカーが協賛したことで、設けられた新たな空間だが、これも人々を異郷に誘う入り口として人々の想像力を刺激することだろう。

もともとはここは斑尾高原スキー場の一部。でも人が集まることで、景観というものは一変してしまう。そこに景観の不思議さ面白さがある。今年も斑尾の異空間で夢のような2日間を過ごし、その余韻を体の中に残したまま東京に帰り、今、暑苦しい都会生活を送っているのだが、やはり、人生の最後は景観のいいところで暮らしたいという想いを強くしながら、今回のコラムを締めたいと思う。

豊村泰彦



ディズニーランドと魅力ある街づくり・・・

日本景観フォーラム会員 野田 路人

6月末の平日、子供一家と東京ディズニーランドに行ってきました。行く前、3歳の孫娘は電話口で「東京ディズニーランドは今年35周年、一緒に行こう！」とハイテンションに連発、我々の歳でディズニー？などと思いは有るもののその言葉に押され、あっという間に日程が決定する運びとなりました。

本当に何年振りか？子供たちを連れて行って以来30年ぶり？と記憶もあいまい。当日、孫娘はディズニーのキャラクターがプリントされたTシャツに同じキャラクターの大きなリックサックを背負い気合十分、国内外問わず周りの多くの人たちもペアーやグループでディズニーのキャラクターを身に着けエンジョイモードが漂い、子供から年配者までが楽しめる別世界と雰囲気、開門と同時に入り閉園ギリギリの時間まで長い1日を満喫してしまいました。

ディズニーランドでは、多くの木や工作物を配置し、入園した時から視界には空と園内の施設しか見えず、現実の世界を遮断し別世界を来園者に提供する工夫をしているとの話を聞いた記憶があります。



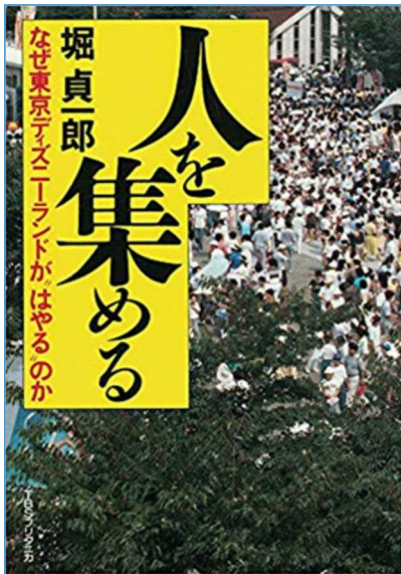
調べると、本家ディズニーランドは1955年に開園、作ったウォルト・ディズニーは、当時遊園地といえど子供だけの遊び場だった中、大人も楽しめる遊園地をつくることを考え、開園後も成功を目指してどんな次の手を打ち続け「ディズニーランドは永遠に完成しない」との言葉を残しています。

また、ディズニーランドの理念として「自分のために作るんじゃない。人が何を望んでいるかを知り、その人たちのために作るんだ」 スタッフに対しては、「ここにくる人たちはただのお客ではなく、ゲストとして迎えてほしい。ディズニーランドを本物の魔法の国、幸福の場所にする仕事を行っているのは、あなたなのです」と語っています。

当初、東京ディズニーランドを運営する「オリエンタルランド」はディズニー社の海外初となる誘致に難航しましたが、電通のプロデューサーから転じた誘致責任者の堀貞一郎氏の「喜びと感動を覚えらるる場所」を基本コンセプトとしたきめ細かいプレゼンにより誘致に成功しました。

誘致後の建設時、当時予定の建設予算1,000億円が1,800億円を超えましたが、社長は「いくら金がかかってもいいから、本物を作ってくれ。創る以上はアメリカに勝てるものでなければいけない」「予算を削って貧弱なものを創ってもゲストが夢の世界へ入れるのか？」と語ったそうで、きめ細かいサービスとホスピタリティの高さで、初年度にして990万人の来場のスタートを切りました。

先日、TV番組の「You 何しに日本へ？」でアメリカから来た老夫婦はインタビューに、「今回も、東京ディズニーリゾートに行くため。」「今までに800回以上行っている。」「どの国のディズニーランドより東京のディズニーランドが世界で一番お客様を大切にしていると感じる。」と答えていました。これも継続されている高いホスピタリティ精神の証かと考えます。



堀貞一郎氏が開園4年後の1987年に出版した「人を集める -なぜ東京ディズニーランドが“はやる”のか」を読み返すと、「第一章：パピネスを求めて人は集まる」と題し、「1：ハピネスを感じる十二要件」をまとめ、さらに「2：東京ディズニーランドにみるハピネスの要件」として①非日常性の環境、②優れた感性、③新しい可能性がいっぱい、④みんなといっしょか半歩先、⑤教育的効果、⑥もう一度来たくなる、⑦おいしい食事とめずらしい買い物、の項目にまとめています。続き「3、CSCS－人を集める必要要件」で、①Clean（クリーン）－安心して集まれる清潔な環境であること、②Safety（セーフティー）－安全な環境であること、Communication（コミュニケーション）心と心のつながり、④Speedy（スピーディー）－時間を有効に使う、とまとめています。

又、「第三章：地方の過疎化は止められる」として「2：魅力ある町づくり」中で①他の町と差別化せよ、②狙い目は若い女性、非日常性を味わえる町、③地域全体の美化を考える、④統一したテーマを持つ、⑤観光地は作り出すもの、とポイントを列挙しています。

少子化が大きな問題となり、都市への人口の集中と地方の過疎化が進み、地方創生が求められる中、自然を生かしお金では買えない歴史的資産や文化遺産を次世代に残し、住む人にとっても訪れる人にとっても魅力ある町づくりを目指す活動に対し、堀氏の分析やディズニーの施設づくりの姿勢の中に多くのヒントになるものがあると思います。

<LFJブックレビュー59>

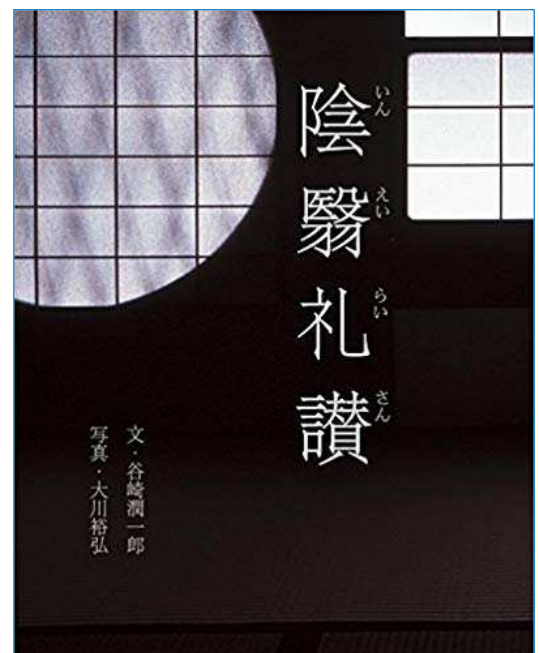
『陰翳礼讃』 谷崎潤一郎著（1933年著） 中公文庫 1975年刊

『春琴抄』『鍵』そして長編『細雪』などの小説を縦横無尽に創作した谷崎潤一郎は、その同じ感性でもって大変魅力的な『陰翳礼讃』というエッセイをものした。陰翳即ち影の効果をほめたたえる、ということとは一体何であろうかと不思議がる輩もいるであろう。しかし、この書の出だしからして谷崎が日常生活で何を考えているかがありありとする。即ち、これは日本と西洋の生活スタイルを具体的に挙げて考える谷崎の比較文明論であろう。

まず谷崎は扇風機の存在、それから日本の古来からの厠即ちトイレと西洋のそれとを比較し、結論は「文明の利器を取り入れるのに勿論異議はないけれど、それならそれで、なぜもう少しわれわれの習慣や趣味生活を重んじ、それに順応するように改良を加えないのであろうか」と300年続いた江戸文明の破壊を嘆くのである。彼の望みは以下のようなものである。「もし東洋に西洋とは全然別個の、独自の科学文明が発達していたならば、どんなにわれわれの社会の有様が今日とは違ったものになっていたであろうか」という独特の論理構造を呈する。日本文明の位置づけを谷崎は次のように考える。「西洋の方は順当な方向を辿って今日に到達したのであり、我等のほうは、優秀な文明に逢着してそれを取り入れざるを得なかった代わりに、過去数千年来発展し来った進路とは違った方向へ歩み出すようになった」即ち、東洋は西洋の手法を用いざるを得ないハンディキャップを持つようになったという指摘である。

しかし、長年育ててきた日本の独自性というものを簡単に捨て去る事は出来ないであろう。「日本の漆器の美しさは、そう云うぼんやりとした薄明りの中に置いてこそ、始めてほんとうに発揮される」ということになり「闇を条件に入れなければ漆器の美しさは考えられないであろう」と。谷崎は日本古来の住宅にある座敷の鈍い光線と床の間の陰翳に言及する。そして日本の町並みについては「寺院のみならず、宮殿でも、庶民の住宅でも、外から見て最も目立つものは、或る場合には瓦葺き、或る場合には茅葺きの大きな屋根と、その庇の下にただよう濃い闇である」。谷崎がこの文章を書いたのは1933年ではほぼ百年前の日本ではある。即ち「暗い部屋に住むこと余儀なくされたわれわれの先祖は、いつしか陰翳のうちに美を発見し、やがては美の目的に添うように陰翳を利用するに至った。」そして室内は「われわれの座敷の美の要素は、この間接の鈍い光線に他ならない」とし「東洋の神秘とは暗がりを持つ不気味な静かさを指す」こととなる。

谷崎のこのような陰翳礼讃を景観の在り方にすえおくと、現代の日本の景観は余りにも遠き存在に見えてしまう。コンビニエンスストアに慣れ切ってしまった現代日本人の感性はこれからどこに向かっていくのであろうか。陰翳を全く無視する方向か、それとも、陰翳を生活のどこかに礼讃するものとして新しいコンセプトを造り出すのであろうか。叶うことではないが、百年後の日本の町並み景観を観てみたいものだ。そして、谷崎の陰翳礼讃がこんなところにあったのかという喜びを味わってみたい思いもする。（斉藤全彦）



天地玄黄 ⑱「電線」

日本には電線が多い。

電線地中化をしている街はあるものの、それもごく一部で、ほとんどが電線剥き出しの蜘蛛の巣が張ったような待ちだ。

電線が貧しさ象徴である

という話をよく耳にするが、

私なりの解釈で、なぜ電線が貧しさの象徴であるか。この場で言いたいと思う。

そもそも貧しさとは何か。

大辞林 第三版 によると

まずしい【貧しい】

（形）〔文〕シク_まづ・し

① 収入が少なく、毎日の生活が苦しい。貧乏である。

「ー・い暮らし」「ー・い家庭」

② 十分に金をかけていない。粗末だ。貧弱だ。

「ー・い身なり」「ー・い設備」「ー・い食事」

③ 乏しい。足りない。十分に満たされていない。

「ー・い想像力」「心がー・い」

〔派生〕ーげ（形動）ーさ（名）

とある。

①は、国民の収入や生活の苦しさから電線が地中化できないわけではないため、直接的な影響はないと考えられる。

②は、電線地中化に対し、十分にお金をかけていないと読み取ることができるが、現状の電線電柱が粗末でお金をかけていないという事にはならないため、これもまた該当しないと考えられる。

では、③はどうだろうか。

乏しい、十分に満たされていない。

日本人にとって十分に満たされていないものは何か。

私は心や幸福感、満足感だと思う。

日本人は心が貧しい。

これがなぜ電線に繋がるのか。

景観の観点から言って、電線は非常に目に付く。

はっきり言って邪魔であるが、その存在感のある電線をなぜ排除しようとならないのか。

電線地中化しようとししないのか。

それは心に余裕がないため、周りに気を向ける余裕がないと考えた。

- ・ 生きること精一杯な人は、電線などに気を向ける余裕はない。
- ・ 仕事に追われてる人は、電線などどうでも良い。
- ・ 家族を養うのに一生懸命な人は、家族の幸せだけで他のことには目もくれない。

電線地中化というのは、個人の充足感があってこそそのものなのだろう。

電線地中化されている街を見ると、どこも観光地や富裕な人が多い場所だ。

では、どうすれば国民の充足感が満たされるか。

個々人の満足感、心が満たされるのか。

今回は国民の満足度が高い国と日本との差を考えてみようと思う。

ゆき



電線だらけの街並み



電線のない街並み

〒150-0031

東京都渋谷区桜丘町14-5-502

TEL : 03(3780)3814

FAX : 03(6379)6681

E-mail : info@keikan-forum.com

URL : <http://www.keikan-forum.org>



Landscape Forum of Japan